

---

# 魂の暗殺者。

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂の暗殺者。

### 【Zコード】

N1082F

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

靈能力者、駄間恭介。彼は魂を自在に操る能力をもつ特異な存在。最愛の彼女のある事件で失った彼。恭介の波乱万丈な物語の一部を軽く語ります。

(前書き)

いつか書くかもしれない連載候補?のテスト作品。

「どうした！ 真奈美！」

息はしている……

「返事しろー！」

しかし、今両手で抱えている真奈美は……

「起きてくれよー。」

無駄だと分かっている。

だけど、分かつていても声を掛けずに入られなかつた。  
例え、その相手が『抜け殻』だとしてもだ

「畜生~~~~~！」

~~~~~

「ちょっと、起きないの？」

ん？ この声は……真奈美？

お前何故……？ いや違う。

そうか、そうだったな。

真奈美の声だが、こいつは真奈美じゃない。

俺はそれを思い出すと、声の反対側に寝返り布団を頭まで被る。

「なにそれ、無視つてます？　なめてますか？」

ああ、つるさい女だ。

真奈美と違つて、とても騒がしい女。  
しかし、今何時だ……？

俺は布団から手を出しつゝ、傍らに置いてある時計を布団の中へ引きずり込んだ。

小さいメタリック色の時計の、上方についている発光ボタンを乱雑に押す。

表示板に9時10分と映る。

なんだ、まだ朝も始まつたばかりじゃないか、……

それに良く考えたら、日曜日だ、事務所は日曜日は休業だ。  
この日だけは、誰がなんと言おうと働かない事にしてるんだ。

「おい、今日は休みだ、日曜だ、休日だ、それ以上しゃべると魂引つこ抜くぞ」

「あ～～～、ひどい～～～！　散々こきつかつておいて」

感高い声が長く糸を引いて部屋に響く。

真奈美の声……いるはずがない人間の声がこの家の中では、いつでもどこにいても、聞こえてくる。

「今日何の日だっけ～？」

「しるか！」

「あ、やつ、じゃ～いいけど、後で後悔しないように」

「元ひより」

声が遠のいていく。

階段を上る音、扉を閉めた音。

自室に戻ったか。

今のやかましい女は、高見沙耶。

俺の恋人、草邊真奈美と同じ姿かたちをしていく。  
だけど、断じて真奈美じゃない。

真奈美の体を一時的に貸し与えている者とでもいうべきか。

まあ、俺が頼み込んで押し込んだんだから、無碍にはできない存在もある。

それより、あいつが言ったことが気になる。

休日だといつのこと、なぜか何か予定があつた気が……うーん、あ！

そうだった、今日あいつの母親、つまり、真奈美の母親と外で飯を食べる予定だつたんだ。

確か、11時……、まずい、準備しないこと、あいつの家は遠いんだよ。

「済まないな、さつあは……」

沙耶はまだ朝の事に腹を立ててこらげじへ、口を聞いてくれない。

一回ふて腐れると長いんだよな。

「機嫌直してくれよ」

返事がまだ返つてこない。

この重い空気に嫌気がさし、辺りに視線を巡らす。今日も昼間だというのに、あちこちに青や赤、黄、緑、紫がかかつた縁、様々な色の人魂とも言えばいいのだろうか。

要は……『魂』が彷徨ついているわけで。

実は、俺は現世に残り、宙に漂う魂の存在を見ることが出来る。いわば、靈感という能力をその身に宿す者。

まあ、世間じやこんなこと公言すると、不審な目で見られたり、距離空けられたり、気味悪がられたり、たまに、祟められたりするわけだが。

「あの魂は……最近近くでお亡くなりになつた、タバコ屋のおばちゃんかな？」

今沙耶と一緒に歩いている道には、魂以外に生きている者も多く行き来している。

それなのに、俺は実際の人間より、なぜか魂の方に興味がいつてしまつ。

能力者特有の癖なのか、それとも単なる俺の嗜好、趣味なのか。

「ああ、本当だ！」

そして沙耶も魂を見ることが出来る。

おばちゃんの魂に笑顔で手を振つている。

俺は、その緑色のおばちゃんの魂に、声を掛けてみる事にしたが、

突然、空へ上昇していく。

思わず、魂の尾の部分を手を伸ばして掴む。逃げる者は追いたくなる習性か、猫か俺は……

おばちゃんを掴んだまま胸元に運んで、声を上から浴びせる。

「おばちゃん、つれないな~ど」行くんだよ

『あーら、恭介君、ごめんね、気づかなかつたわ』

「おばちゃん、こんなにちわ

『沙耶ちゃんも一緒にね、こんなにちわ

おばちゃんの魂の形を伸縮しながら、人間のような姿へと変わつていいく。

魂は普段はテレビなどで映される、墓場で彷徨う人魂のよつた、ボーリくらいの大きさで彷徨つてゐんだけど、あれはノーマルな姿であつて、その姿は気まぐれで変えれるようだ。

大体、一番記憶に残つてゐる生前の姿に、変わることが多いけど。おばちゃんは妙齢の女性の姿に変化した。

案外美人だ。

魂に残された記憶の断片の中で、20代の頃が彼女にとつて最も輝いていたんだろう。

俺は彼女を捕まえた事を後悔した。

なぜなら もつ、本当に良くしゃべるからだ。

べらべらと、女つて沙耶もそつだけど、話しだしたら止まらない。  
俺の彼女の真奈美はもつと落ち着いて……いや、辞めておひづ。

俺は壁に持たれて、彼女達が話している間、携帯でメールを打っていた。

相手は親父。

今から沙耶、いや、真奈美の家に行く事をメールを打つて送信した。

ひたすら長い、井戸端会議がおばちゃんと沙耶の間で交わされたが、気が済んだのか話が終焉を迎えたようだ。  
沙耶がおばちゃんの魂に手を振ったかと思つと、一いつ向むかひに向つてくへ。

「「めん、待つた？」

「馬鹿、間に合わなくなるだろ、タクシー乗るぞ」

俺達はタクシーに乗り込んだ。

「おひすやん、×市6丁目ね」

「はい」

住宅街をタクシーはどんどん進んでいく。  
バックミラーに映るおつかやんの目がじりじりと睨んだ

気がした。

沙耶は手のひらを口に当てて大きな欠伸をした。

俺もまだ眠りが足りないのか、眠気が差し込んでくると、いつの間にか浅い眠りについてしまう。

「…………

「…………

「…………

「ん?」

「起きてつづばーーー！」

着いたのか……

いや、ここどじだよ、「場地帯の一角のようだが。

ふと前を見ると、タクシーの運ちゃんがいない。

隣を見ると、沙耶が怯えた顔で、肩を縮めて震えていた。

「あのおっちゃん、変だよ、良く分からない場所に私たち連れてきたかと思うと、急停止して外に出て行つてどこか行っちゃったよ

「なんだつて?」

「キヤアアア

沙耶が突然縄を裂くような声をあげる。

俺はその声に驚き、咄嗟に沙耶の視線の先を追つてみると、外でタクシーの運ちゃんが立っていた。

しかし、その形相が普通じゃない。

腕に電気ノコギリも抱えているし。

ホラーかよ。

だが、俺はこんな状況に置かれていても、心の表面が波打つ事は無かつた。

なぜなら、こんな事は日常茶飯事で、それにタクシーに乗った時から、ある程度予想をしていたから。

俺は沙耶に車の中にいるように指示すると、ゆっくりタクシーのドアを開けて、外に躍り出る。

「待たせたかな？」

「ヒヒヒ、そんなに待ってないよ～ん

ちつふざけた奴だ。

俺は乗った時からこいつの存在は分かつていた。

タクシーのおっちゃんの青色の魂に吸い付くドス黒い色をした別の魂。

「コイツの事は気づいていた。

おっちゃんを操っているんだ。

俺を襲つつもりらしい。

殺氣を撒き散らせながら、『デンノロ』の電源を入れ、回転させはじめた。

じりじり、距離を縮めてくる、

突然、走り出して、ノロを突き出してきた。

「オラー！ 死ねや、この悪党が！ お前のせいだ、どんだけの魂が酷い目に会つてると思つてるんだ～～～！」

「知らんがな」

軽く『デンノロ』を避けると、奴の後ろに回つこむ。

後ろから、ノコを抱える左手を蹴り上げると、ノコが宙を舞い前方に騒がしい音を立てながら地面に転がり、首の地面に擦れて、更に騒がしい音を撒き散らせていた。

「取りあえず、じつけ……！」

俺は右手が青く光るのを確認すると、それをおっちゃんの体の心臓の辺りへ、素早く潜りこませる。

表皮をすり抜け、中の魂を一つ剥ぎ取る事に成功した。手を引き抜いた瞬間、おっちゃんの体が糸が切れた人形のように、その場に倒れこむ。

「あ、魂1個多く取りすぎたな、すまん、おっちゃん」

青い方の魂に罰が悪そうに軽く会釀をすると、へばりついていた黒い魂を引き剥がして、青い魂をおっちゃんの体の中へ戻す。戻したは良いけど、すぐには動かない。気絶をしているようだ。

さーーっと……

「お前の処理だが」

右手に握んだ黒い魂を睨み話かける。

「おい、お前俺が駆間恭介って事を知つての狼藉か？」

ちよつと時代劇のようなセリフで凄んでみた。

「知つてるよ、知つてるから、じいつに乗つ取つてお前を……

「ふむ、殺そうとしたわけだな」

ふ、俺って嫌われているんだな。

仕事で結構悪しき魂を、捕まえては握りつぶしたり、便所に流してみたり色々してるからな～恨みを星の数ほど買っているのは間違いない。

「取りあえず、お前死ぬか？　いや、その表現はまずいな、死んでるしな？　そうだな、この世から消えてみる？」

俺は「ぐく普通の選択肢を彼に語った。

うんといえば、全く容赦なしで握りつぶす。

「ま、待ってくれ～～！」

ん？

「ごめん、悪かった、ちょっと間が差したんだ、俺の知り合いの魂が、お前に握りつぶされたって聞いて、つい復讐心に火がついて……分かるだろ？」

「いや、申し訳ないが分からないな、火がついたからって、俺に立ち向かうなんて事は俺ならしない。魂の分際で俺に勝つ勝算なんか無いからな、リスクの事も考えないと生きていけないぞ」

思わず、死んでるものに生きている者へ語るような教訓めいた言葉を発してしまった。

舌打ちをして自分の馬鹿差加減を悔いる。

「ああ、本当に許して、『ごめんなさい、もうしません、あなたに仕

えます、ただで何でもします、どうか命、いや魂だけはお助けを

ふ～ん、何でもしますか……、うーん、そつだ。

ちょうど、俺はある仕事をこなす人材を募集する広告をだすつもりだった事を思い出した。

仕事内容は　　魂抜いた後の体に入つてもらつて俺の指示通り、  
その体を動かす。  
この仕事は魂しか遂行できないから、魂材とでも言つた方がいい  
かもしれない。

時給300円で……でも、300円たつて10時間じゃ3000  
円だし、馬鹿にならないよな。

こいつはタダ働きを自ら懇願してゐるし、こいつにせりあつ  
ひせりあつてもらひやつつかないかな？

「よし、分かつた！　お前がタダ働きする事を条件に、握りつぶす  
事は辞めておこう」

「おお、助かる、恭介さんあんたいい男だ！　どこまでも付いてい  
きますぜ！」

調子いい奴だ、タダほど怖い者は無いつつが、タダほど安心  
物も無い訳だし……

「それじゃ俺についてきなさい

「へいー。」

俺の肩の上に魂はひょいと乗つてきた。  
タクシーに向つて、手を振つてみる。  
沙耶は中で手を振りかえしてきた。

空を仰ぐと、まだ日が昇りきらないことこのに、太陽の日差しは  
いつも増してきつく感じられた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1082f/>

---

魂の暗殺者。

2010年10月25日13時22分発行